『福井の科学者』にみる日本科学者会議福井支部50年の活動

　　　　　　　　 　　　　 　　　　 髙木　秀男（日本科学者会議福井支部）

日本科学者会議福井支部は，支部結成からすでに50年を超えた．『福井の科学者』の編集に長く関わってきた経験をふまえ，これまでの福井支部の主な活動を支部機関誌『福井の科学者』から，独断と偏見を恐れずピックアップしてみた．『福井の科学者』は福井支部会員以外にも執筆を依頼し広く紙面を解放してきたので，福井支部の活動でない報告も掲載されているが，広く発表の場を提供してきたのも大きな見方では福井支部の活動である．そうみると『福井の科学者』にはこれまで実に様々なテーマで多くの執筆者が登場している．その中で福井支部の活動の経緯を，掲載された論文の中から追ってみた．

**１．はじめに**

日本科学者会議（JSA）の創立は，1965年7月1日に東京在住の科学者14名によって出された「科学者の全国組織についてのよびかけ」をきっかけとする．そして同年10月「科学者の全国組織をめざす東京準備会」が発足し，同年12月4日に日本科学者会議の創立発起人総会が明治大学で開催された．総会には1,186人の発起人のうち，16都道府県から出席した362名と，東京在住の入会希望者109名の計471名が参加し，「創立宣言」を採択し会則が決定された(1)．

日本科学者会議福井支部が結成されたのは，

JSA創立から6年後のことである．1967年6月全国事務局との連絡がはじまり，1968年1月には福井大学工学部の下田屋一朗氏が中心となって福井支部準備会（２）を発足させ，1969年4月には10名余が直接本部に入会手続きをとり，事務局体制も整え，他支部の活動と連帯してシンポジウムなどに参加した．

私が福井工大に着任したのは1970年4月で，まだ準備会の時代であったが，すぐに会員登録をし，1971年10月に行なった京都支部と福井支部準備会との共催による大飯原発現地調査に私も参加した．そして会員も40名を超えた1971年11月初め，22名の呼びかけ人の連名で「福井支部結成のよびかけ」（２）を発表し，県内2,000余名の科学者・技術者・教員・医師らに発送した．その結果，会員は60名に達し，1971年11月23日，福井支部結成総会を開催し「日本科学者会議福井支部結成宣言」と「支部運営のための申し合わせ」を決定した(3)．幹事に13名が選出され，代表幹事には福井大学教育学部の影山剛氏，事務局長に下田屋一朗氏が就任した．

福井支部準備会の時代から福井支部結成10周年までの活動記録については，『福井の科学者』30号（1981年）に資料として掲載されている．それによれば1971年12月4日～5日に第8回全国公害シンポジウム「電力産業と公害」に参加・報告，同年12月25日に『福井支部ニュース』第1号発行，1972年3月4日に福井支部，福大教職組，福大教育学部助講会の三者共催による「福井若手シンポ」開催とある．

1972年5月に開かれた第1回定期総会で，原発問題研究委員会と公害問題研究委員会の設置が決まり，8月には北海道岩内で開催された第1回全国原発シンポに参加した．そして原発集中県の福井県が第2回原発シンポの候補地に上がり，小浜市で1973年8月に京都支部との共催で開催された．

一方，公害問題は全国的な「新全国総合開発計画」批判の高まりのなかで，日本科学者会議の中心課題の一つであった．福井支部は例会「福井臨工開発計画の問題点」を皮切りに，北陸三支部共催の富山新港の合同調査，金沢新港合同調査，福井臨工合同調査を行なった．

福井支部の機関誌『福井の科学者』の創刊は，1973年12月1日である．当時，支部の機関誌を出していた支部がいくつかあったと思うが，たまたま長野支部が出した『信州の科学者』を見る機会があり，福井支部でも支部機関誌を出そうという話になったのである．

なお『福井の科学者』第30号は，福井支部結成10周年記念特大号として発行されたので，福井支部10年間の主要な活動についての報告が掲載されおり，資料としてこの間の活動記録も年表の形で載っているので参照されたい．

**２．『福井の科学者』創刊号から30号まで**

福井支部の機関誌『福井の科学者』は，支部例会で話された内容を機関誌に投稿してもらった論文を中心に編集されていた．また支部例会の講師には会員以外の人にもお願いし，それを機会に会員になってもらったこともよくあった．『福井の科学者』への投稿も，会員外の人にもお願いしてきた．

福井支部結成2周年を迎えた1973年12月，『福井の科学者』創刊号が発行された．すでに活動を始めていた原発問題と公害問題の研究委員会の活動など，7本の記事が掲載された．巻頭言を書いた城谷豊支部代表幹事は，「科学者の責任と役割」の中で，「当支部の存在は広く県内に知られ，少なくとも原発問題･公害問題に関して，日本科学者会議の活動に対する期待を広範な県民から寄せられる結果になりました」と指摘し，科学者の責任と役割について論じた．

第2号には農業・食糧問題，公害問題，教育問題など論考5本が掲載された．その中で吉武哲夫氏の「農業問題と食糧問題」が特に注目された．当時，世界人口の急激な増加や食糧需要構造の変化により，世界的な食糧危機が叫ばれていた．日本の食糧自給率は先進国の中でもっとも低い方であった．かねてから食糧問題に関心を持ち，日本農業の将来に強い危惧をいだいていた吉武氏は，ひろく一般の人々にこの問題の理解を得たいと考えこの論文を書いた．世界の人口と食糧，未開発農地の開発，収量の増加，動物性食糧の需要増加，日本の食糧自給率，世界の食糧需給と日本の食糧輸入，日本農業の変貌と現況，今後の日本農業について書かれたこの論文は，『日本の科学者』編集委員会からも注目され，『日本の科学者』に転載させてほしいと要請され，転載された．そして1975年に福井支部に農業・食糧問題研究委員会が設置された．

第３号で目立つのは，桜井康宏氏の「住みよい街づくりを考える―障害者と街づくり運動から―」である．全国障害者問題研究会福井支部の行なった集会で報告したものである．この論文では，福井市の「障害者と街づくり」運動の経過を総括し，建築家が社会のなかで果たさなければならない役割について触れている．桜井氏はこの論文を書いたあとも，長く障害者問題，街づくり運動に取り組み，現在も社会福祉法人「ハスの実の家」の理事長を務めている．

第4号から新しい企画として，「福井を考える」シリーズが始まり，「福井の経済・産業」「福井市民のサークル活動」「福井の教育」「福井の交通」「伝統工芸」「自治意識」「自然環境」「遺跡」「児童文化」「有機農業」「地域施設」「福祉」「住宅問題」などが取り上げられ，第40号まで23回続いた．

さて第5号で反響の大きかった報告は，富山大学の河野昭一氏が書いた「福井県坂井郡三里浜一帯における大気汚染と植物被害」である．当時福井臨港工業地帯を開発することが決定され，その一陣として福井火力発電所が完成し1973年1月より営業運転をはじめた．その後，杉の木の立ち枯れが目立つようになり，地元の芦原町は河野氏に調査を依頼した．この調査の結果，火力発電所からでる硫黄酸化物による大気汚染が原因であることが明らかにされ，後に火力発電所に硫黄酸化物の除去装置を付けることになった．

第8号と第9号に連載された庄野義之氏の「若狭湾の原子力発電所―その10年間から―Ⅰ，Ⅱ」は，初期の電力会社や国の原発推進のやり方に対する全面的な批判であり貴重な文献である．

　そして庄野氏は，「高速増殖炉とは」という解説記事を第9号から第14号まで6回にわたって連載した．この解説は原理，軽水炉との違い，危険性まで詳しく説明し，「新型の夢の原子炉」として宣伝されていた高速増殖炉に関する貴重な初期の批判文献であった．庄野氏はこの連載のほかにも原発問題に関する報告を毎号のように寄稿し，その成果はゆきのした文化協会と日本科学者会議福井支部の共同編集『父と子の原発ノート』（４）に結実した．

　なお第11号は福井支部結成5周年記念号として発行され，塩田庄兵衛日本科学者会議代表幹事の「福井支部結成5周年に寄せて」，清水英夫福井大学長の「地方における大学の役割」，鈴木格一福井大学教育学部長の「教育者と科学者」が掲載された．

　福井支部は，よく市民公開講座を開いてきた．支部結成5周年記念の時は，3回にわたって「福井を考える市民公開講座」を開催した．その内容は12号以降に掲載され，さらに「福井を考える」シリーズとして定着した．

このシリーズには多くの方が執筆したが，中でも児童文化運動に取り組んでいた小林剛氏の連載，遺跡や埋蔵文化財の問題に取り組んでいた平井健一氏らの報告，街づくりや県庁移転問題に取り組んできた桜井康宏氏の報告が注目された．

「福井を考える」シリーズの成果をもとに支部結成10周年記念事業として出版されたのが，単行本『地域を見直す』(5)であり，15周年記念事業として出版された単行本『地域を考える』(6)である．いずれの出版活動も成功させ，支部財政に寄与する成果を挙げた．

　さて平和運動について，私は城谷豊代表幹事が自ら日本科学者会議福井支部と墨書して製作した襷をかけて平和大行進に参加した記憶があるが，第18号には，滝史郎氏が核兵器完全禁止を国連に要請する代表団の一員として参加した報告が掲載されている．滝氏はNGO国際シンポ福井県支持委員会から要請され，総勢約500名の日本国民代表団の一員として，2,000万人の署名を持って国連に要請し，アメリカ各地で市民と交流するために1978年5月22日から18日間派遣されたのである．代表団には様々な職業の方が参加されており，所属団体も労働4団体，地婦連，生協連，日青協，宗教NGO，平和委員会，日本科学者会議，全学連などで，報告を読むと当時いかに大きな運動の盛り上がりがあったかがわかる(7)．

　第30号は，福井支部結成10周年記念特大号として出版され，公害問題，原発問題，農業･食糧問題の三つの研究委員会の委員長から総括的な活動報告がされている．なかでも庄野義之氏の一連の原発問題への取り組みは，特筆すべき業績といえる．現在では原発問題の文献は山のようにあるが，当時『福井の科学者』に多数発表された庄野氏の論考は，非常に貴重な文献であった．なお教育問題に精力的に取り組んできた小林剛氏からは，第30号に「支部活動に現れた「教育」10年」が報告された．

**３．『福井の科学者』31号からから60号まで**

 第31号から「福井を考える」シリーズで始まった玉置伸悟氏の「福井の住宅」は，その特徴や歴史を総合的に研究したもので，連載は実に9回にも及んだ．

　第33号には，支部例会で取り上げられた「若狭湾の原子力発電所の現状と高速増殖炉「もんじゅ」」が特集された．報告者は福井支部「原子力問題を考える会」の小幡谷洋一氏，林庄司氏，山本富士夫氏，庄野義之氏であった．原発問題は『福井の科学者』がもっとも多く取り上げた課題で，そのことはその後も変わっていない．

　ところで『福井の科学者』は，創刊当初より福井支部の会員でない人にも広く執筆を依頼し，発表の場を提供してきた．原善四郎日本科学者会議事務局長もその一人である．元東京大学教授の原氏には，第37号，第44号，第46号に越前国（芝原，五分一，南条郡嶋村・丹生郡金谷・敦賀郡鋳物師村）の鋳物師に関する論考を投稿していただいた．その内容は専門家でないと書けないものである．

　第38号には首藤重幸氏の「福井工大事件に関する学問･思想の自由委員会の見解を読んで」が掲載された．この論文については，筆者の別報告「学問･思想の自由と福井工大事件」で触れるので紹介を割愛する．

　第41号，第42号，第43号には，桜井康宏氏の長文の論文「見田石介・井尻正二・工藤晃の資本論の方法に学ぶ―計画論ノートその１―」，「井尻正二の科学論に学ぶ（上）―計画論ノートその２―」，「井尻正二の科学論に学ぶ（下）―計画論ノートその３―」が連載された．そして桜井氏の「計画論ノート」は第46号，第48号，第55号まで６回続いた．

　この連載について桜井氏は，第１回の冒頭に「この小論は，筆者が研究テーマとしている建築計画とりわけ地域施設計画や，住宅計画，都市計画，地域計画といった人間の生活空間の計画を科学的なものにするための方法論を模索するとともに，そのための学問としてある建築計画学の科学としての性格を検討するための素材としてノート化しようとするものである」と書いている．

　気宇壮大な研究計画であることが，この書き出しからうかがえる．だが論文の内容は非常に難解で，マルクスの資本論や井尻正二の科学論の基礎知識がない私には残念ながら理解不可能であった．

　第42号と第44号には，「ハスの実の家」の問題が取り上げられ，青木暁氏(8)，渡辺登美子氏(9)，三橋幸代氏(10)の報告が掲載された．いまや立派な社会福祉法人となっている「ハスの実の家」の初期の運動を知ることができる．そして第52号には「ハスの実の家」の特集が組まれ，青木達雄氏(11)，内山秀樹氏(12)，桜井康宏氏(13)が執筆した．

　第48号，第51号，第52号，第54号，第55号に連載された河原正実氏の「障害者運動のゆくえ」には，ベトナム戦争で枯葉剤を浴びた母親から生まれた二重体児（ベトちゃんとドクちゃん）に特製車いすを送る運動が詳細に報告された．この運動は，福井大学教育学部の藤本文朗氏が中心となって始めたもので，大きな盛り上がりをみせた．なお障害者問題については，本号の伊藤勇氏の論考も参照されたい．

　第49号は「福井工大髙木助教授不当解雇裁判特集」として発行された．首藤重幸氏の「福井工大事件第一審判決について」と，この号でしか見られない「福井工大髙木助教授不当解雇事件裁判資料」が掲載されている．

　第50号には「ゆきんこ共同保育所づくり」の運動が特集され，久常良氏，山崎愛世氏，松木健一氏の報告が掲載された．ゆきんこ共同保育所は，現在も「認定こども園ゆきんこ光陽こども園」として活動を続けている．

　私事になるが，私が東北大学理学研究科院生会の副委員長をしていたとき，東北大学教職員組合は，旧帝大のなかで保育所がないのは東北大学だけだということで，保育所づくり運動をしていた．東北大学全学院生協議会はその運動を支援していたので，私もその運動にかかわった．運動の結果，零歳児もあずかる保育所が学内に設置された．翌年には，要求により院生の子どもも入所が可能となり，生まれたばかりの私の長男も入所ができた．なお私は，坂東弘治夫妻が京都大学での保育所づくり運動のリーダーだったことを後で知った．運動は繋がっていたのである．

第58号には小倉久和氏の「医療における情報化」という13頁に及ぶ長文の論文が掲載された．これは小倉氏が前任地の新設医大・高知医科大学で9年あまり医療情報システムの開発に携わってきた経験を，福井支部例会や福井大学公開講座，地域の医師の集まりで話した内容を整理したものである．

　中身は，①病院情報システムは何をしたか，②病院情報システムはどのように発展してきたか，③日本における病院情報システムはどのように導入され，何を解決したか，④医療のシステムと医療情報システムの課題，⑤まとめに替えてで，今では常識となった初期の医療の情報化に関する非常に優れたレヴュー論文となっている．

**４．『福井の科学者』第61号から第90号まで**

　1991年2月9日，関西電力美浜２号炉で「起こり得ない」はずの事故が実際に起こり，我国の事故としては初めて「緊急炉心冷却装置」が作動した．第61号に庄野義之の詳細な報告が掲載された（９）．一歩間違えればスリーマイル島原発事故のような深刻な「空たき事故」になりかねない危険なものであった．

　原発問題は福井支部の重要課題として『福井の科学者』でも常に取り上げてきた．この時期には，首藤重幸は法学者の立場から福井支部の「原子力問題を考える会」に参加し，一連の論考を発表した(10)~(13)．

　1992年11月7日，福井大学において教育問題シンポジウム「福井の教育実践と教育改革」が開かれ，小学校，中学校，高校，大学の現場教師から父母・市民まで50余名が集まった．第65号は一冊丸ごとこのシンポの特集号として発行された．教育問題は入試問題･大学改革・教育実践・障害児教育・ひきこもりやいじめ問題など非常に多岐に及ぶので，これまでも色々な形で取り上げられてきたが，まるごと一冊というのはこの号が初めてであった．

　第66号では自然保護の特集が組まれ，佐々治寛之氏が今では常識となっている生物多様性の問題(14)を，岩泉俊雄氏が農薬問題を，中池見湿地の問題(15)を笹木知恵子氏が報告している．そして生物多様性尊重の問題は，第71号の富山大学の昆虫学者・鈴木邦雄氏の非常に優れた論文(16)につながっていった．なお中池見湿地の保存運動は大きな盛り上がりをみせ，その後も長田勝氏(17)や横山俊一氏ら(18)，笹木進氏の詳細な報告(19)が『福井の科学者』に掲載された．

　そして1997年1月25日，「自然を守るとは」というテーマで日本科学者会議福井支部結成25周年記念市民公開講座が開催された．河野昭一京都大学教授が基調講演「21世紀の環境問題を展望する」(20)を行ない，シンポジウム「中池見湿地の保全とトラスト運動」(21)が開かれ，その内容は第74号に掲載された．なおこの号には『日本の科学者』1997年3月号に掲載された長田勝・森透氏の「中池見湿地保存運動の現状」も転載されたので，一冊まるごと「中池見湿地保存」特集号となった．そして第77号には，長田・森両氏の「敦賀市中池見湿地の保全とフィールド･ミュージアム構想」(21)も発表された．

　第75号には，当時福井県で問題となっていた関西電力のプルサーマル計画を批判する目方守氏の論文(22)が発表された．この論文の注目すべき点は，高速増殖炉計画の挫折で使い道がなくなりたまり続けるプルトニウムの利用法として浮上してきた，軽水炉の燃料としてMOX燃料を混ぜて使うプルサーマル計画の様々な問題点を，だれでも理解できるやさしい言葉で丁寧に解説している点である．

　第76号には木村亮氏が23頁に及ぶ大作の論文を投稿してくれた．それが『福井の科学者』でそれまで取り上げられてこなかった「自治体職員のキャリア形成―福井県庁の事例より」

という論文(23)である．膨大な資料を駆使して戦後の福井県政と県庁人事を分析し，その特徴を明らかにした労作で，長文ながら一気に読ませる優れた内容であった．

　第77号に掲載された平野治和氏の「ダイオキシンによる母乳・食品汚染と人体影響」(23)は，支部結成記念講演会での講演に加筆したものである．当時，ダイオキシン問題は連日のようにマスメディアで「史上最強の毒物」「母乳が汚染」「生殖機能や免疫機能に大きなダメージ」と報道されていた．この問題に医師の立場から関心を持っていた平野氏に，ダイオキシンの人体への影響について講演を依頼したのである．

　第78号には，中世史が専門の松浦義則氏による本格的な歴史論文「戦国期の白山麓地域」が投稿された(24)．16世紀の加賀・越前・美濃にまたがる白山麓地域とそれぞれの国との関係を史料から読み解いた力作である．

　第81号には，高木和美氏の介護問題に関する論文「現行介護保険と介護保障の相違について」(25)が発表された．14頁にわたる非常に格調高い本格的な論文で感心した．同号には久常良・舟木紳介亮氏の「在宅介護支援センターの予防的地域福祉機能」(26)も投稿され，介護問題のミニ特集となった．なお久常・舟木両氏は，その後も89，90，91号と介護問題に関する論文を連続して投稿した．

　第82号には，大学改革に関する注目すべき論文２点が掲載された．一つは京都大学の岡田知弘氏の「21世紀の大学像と独立行政法人化問題」(27)で，もう一つが富山国際大学の伊ヶ崎暁生氏の「日本の大学―その現状・歴史的性格と改革の課題」(28)である．いずれもJSA北陸地区合同研究会で報告されたものである．

　岡田氏の報告は法人化前のものであるが，独立行政法人化がかかえる様々な問題点を指摘し，結論として「学問の自由」を制度的に保障している「大学の自治」を敵視し政府が思うように大学をコントロールしようとしているのが，独立行政法人化であると主張した．

　なお国立大学の法人化以降，私は岐阜大学の竹内章郎氏の書かれた法人化に関わる論文「体験的国立大学論」(29)を読んで大変感銘を受けたので，法人化までの歴史と法人化以降の国立大学の実態を知るための参考文献としてあえて加えておきたい．

　法人化以降，現在の国公立大学は期待されている社会的責任を果たすことが困難な状態に追い込まれており，まさに「死に体」の状態にある．大学教員や学生が声をあげ，「大学ルネサンス」を目指さなければ日本の大学の未来はない．

第85号には，2000年8月に日中友好協会福井支部が主催した「満洲帝国展」で講演した隼田嘉彦氏の講演「満州国について」(30)が掲載された．そして第86号には，2001年8月に行なわれた日中友好協会福井支部の「9.18「満州事変70周年記念展」で発表された偽満・皇宮博物院の王麗杰・王桂勤両氏の優れた論文の日本語訳が掲載された(31)．二つの報告を読めば，大日本帝国の傀儡国家『満洲国』の歴史と実態がよくわかる．

　第88号は福井支部結成30周年記念特集号として発行されたが，30周年記念シンポジウムで報告された地域公共交通に関わる論文が多数掲載された．そして89号から95号まで『福井の科学者』は，特集を組んで編集・発行された．もちろん特集以外の投稿論文も掲載されるので，執筆者の幅に広がりがみられ，この時期はページ数も増大し内容も充実している．この時期に編集長をしていた山川修氏の努力の賜である．

　ちなみに89号の特集は「自然エネルギー」特集，90号は「食と農業」特集であった．それぞれ6本と5本の原稿が寄せられたが，その過半数が毎日新聞記者をはじめ福井支部の会員でない方の投稿であった．そんな中で，会員の加藤武市氏が投稿した「福井の食と農および健康」(32)は15頁の力作で，後に単行本『畜産物と健康』(33)の出版につながった．

**５．『福井の科学者』第91号から120号まで**

　第91号は「教育」特集号として発行され，6本の論文が掲載された．その中でも小倉久和氏の「大学システムにおける多様性」(34)は，一気に読ませる非常に説得力のある論考であった．その内容は，福井大学と福井医科大学の統合の合意を受けて始まった統合協議会の教育分科会委員として小倉氏が参加した際，議論となった共通教育・教養教育の考え方について書かれた貴重な記録である．

　第92号では「自然エネルギーと環境問題」の特集が組まれ5本の論考が寄せられたが，その中の「自然熱による路面の雪対策」(35)は，福井県庁の技術者である宮本重信氏が福井で実際に取り組んだ仕事である．

　第93・94合併号は，『福井の科学者』では珍しい「地域通貨」という特集が組まれ，10本もの論文が掲載された．この特集は「森のエネルギーフォーラム」主催で福井県立大にて開催された地域通貨シンポジウムに参加された方々が，『福井の科学者』に投稿してくれた結果である．第一部の地域通貨の実践に5本，第二部の地域通貨の批判的検討に5本の報告が掲載され，充実した内容となった．なお，この号には笹木進氏の「開発計画の中止と今後の課題」(36)が投稿され，中池見湿地保護活動の詳しい経過報告がなされている．

　第95号は，「福井のまちづくりを考える」特集が組まれ，5本の論文が掲載されたが，加えて，竹内謙二氏の「福井空港拡張反対運動の勝利的終結について」(37)という注目すべき投稿論文が掲載された．地元住民の空港拡張反対運動が始まって19年目の2003年6月，西川一誠福井県知事は福井空港拡張計画の断念を発表したのである．その長い闘いの経緯を，運動の中心にいた竹内氏がまとめた貴重な記録といえる．

　第96号には，日本科学者会議福井支部が結成される前の福井における知識人の集まり「哲学研究会」や「ふくい思想の会」の活動について，加藤忠夫氏の報告「「ふくい思想の会」のこと」(38)が掲載された．

第97号は，2005年3月に開催された支部結成33周年記念講演会「中池見湿地の保全とNPO法人「ウエットランド中池見」」で話された講演を中心に構成された．基調講演をされた森透氏の報告(39)は，これまでの中池見湿地保全運動の経過をまとめたものである．

第98号は，20年に及ぶ高速増殖炉「もんじゅ」訴訟の最高裁不当判決をうけて，原発問題を中心とした編集となった．不当判決批判については島田広弁護士に書いて頂き(40)，原告としてかかわった渡辺三郎氏にはもんじゅ裁判20年を振り返っていただいた(41)．

　　第99号には憲法や教育基本法の改悪の動きを伝える原稿が寄せられたが，平和運動を長く続けているゆきのした文化協会の田島伸浩氏に，「平和文化史料館ゆきのした」の活動や所蔵史料について書いて頂いた(42)．

第100号は，100号を記念する文章，「学力低下を考える」特集と特別寄稿論文からなる68頁の特大号となった．特に長田好弘東京支部代表幹事の特別寄稿「ふたたび科学・技術に新しい風を」(43)は100号記念号にふさわしい大変な力作である．長田氏は103号にも続編とも言える特別寄稿「研究者の権利のための闘争」を投稿してくれた．これは若い研究者が次々と自殺に追い込まれたNTT電気通信研究所における壮絶な権利闘争の歴史を描いた，31頁に及ぶ渾身の大論文(44)であった．『福井の科学者』が100号を迎えたとき，東京支部・電気通信研究所分会の機関誌『新しい風』は412号に達していた．月刊の分会機関誌を刊行できる力は，まさに通研分会の科学者たちが過去の闘争で鍛えられたからである．

　第101号には佐藤正雄氏の「福井豪雨による堤防決壊と足羽川ダム計画を考える」(45)が掲載された．足羽川ダムは1966年予備調査がはじまり，地元住民の反対運動や計画変更などもあり，未だに完成していない問題のダムである．しかし2004年の福井豪雨により足羽川の堤防が決壊し甚大な被害が出たことから，足羽川ダムの早期実現を求める声が上がり計画が再び動きだした．もしダムが完成していたら堤防は決壊しなかったのか，福井県議会での佐藤県議の追及の報告である．なお佐藤氏は，北陸新幹線問題でも107号に問題点を指摘する長文の論考を書いている．さらに101号には佐分利豊氏の「数学文化と数学教育についての再考」(47)という支部例会ではじめて聞いた論文の前編が掲載され，103号に中編(48)が投稿されたものの，後編が投稿されなかったのは力の入った論文だっただけに残念である．

第104号には渡辺三郎氏の「地震と原発」が掲載された(49)．阪神大地震の2日後，原子力安全委員会は専門家からなる原子力施設耐震安全委員会を発足させた．その検討会の報告書に対する全面批判を展開したのが渡辺氏の論文である．

第105号には，福井県庁の技師として公共事業に取り組んできた宮本重信氏の重厚な論文「福井での公共事業の技術を考える」(50)が発表された．技術者が地域の実情や自然に適した分散型技術を使って，道路や河川，上下水道などの公共事業を行なった貴重な記録である．

第106号には世界科学者連盟副会長の湯淺精二氏が「「研究者の倫理と権利の問題」(51)を投稿してくれた．湯淺氏はJSA「科学者の権利問題委員会」の委員長でもあり，同委員会がまとめた「研究者の権利・地位宣言」「研究者の倫理綱領」の中身と討論・普及を訴えた．

第108号には，医師の平野治和氏が「福井の医療崩壊」(52)について書いてくれた．「医療崩壊」という言葉は，コロナ禍が叫ばれていたときよく聞いたが，実はその前から指摘されていたのである．平野氏は救急医療，産科・婦人科医療の実情，医師不足，医師労働，医療機関の経営，医師研修，社会保障のあり方など福井の医療崩壊の問題を総合的に報告している．

第108号には，他に山本富士夫氏の紀行文「“平和と友好の旅―近くて遠い国・韓国―”で感じたことなど」(53)が掲載された．これは平和友好団体の福井県AALAが企画した2回目のものだが，単なる観光旅行ではなく，前もって講演会や学習会を行なってからでかける研修旅行である．山本氏は毎年実行された福井県AALAの研修旅行の紀行文を，その後も『福井の科学者』に投稿している．

　第109号には，隼田嘉彦氏の「戦地への手紙」が掲載された(54)．これは1935年5月に鯖江の歩兵36連隊に入営し，満洲派遣が下命された嶋田嘉右衛門に送られた戦地への手紙を隼田氏が解読した貴重な労作である．

第111号には，素粒子論の専門家で科学史・科学論にも詳しい菅野礼司氏に「物理学の基礎としての物質と真空概念の変遷」(55)を易しい言葉で書いていただいた．そして山本雅彦氏には，若狭の原発の耐震安全性評価について詳細な批判論文「「大地震」の「活動期」に入った日本列島での若狭の原発」(56)を投稿していただいた．

　第113号には，坂東昌子氏の「夫の思いを受け継ぐ」(57)が投稿され，科学者の社会的責任，オーバードクター問題，女性科学者問題，平和問題など幅広い問題が論ぜられた．

　第114号には，石川支部の児玉一八氏が敦賀市で「原発問題と日本の科学者」をテーマに開催された日本科学者会議夏の学校の詳しい報告(58)を投稿された．また北原武道氏は「若狭町から社会を覗けば」(59)を投稿し，町会議員として経験・取り組んだ事例から，偉人顕彰と内心の自由の問題，英霊顕彰と自治体の関与の問題，有害鳥獣焼却問題について報告された．

　第115号は，原発問題特集号として発行された．東日本大震災１ヶ月後の4月11日，福井支部は緊急シンポジウムを開催したが，130名もの参加者があった．そのとき話された山本富士夫氏(60)，児玉一八氏(61)，飯田克平氏(62)と文書発言された平野治和氏(63)の報告が115号に掲載された．山本・児玉・飯田の3氏は原発問題に詳しい専門家で，その指摘は的確である．そして医師である平野氏の放射線被ばくによる健康への影響に関する指摘は，重要で貴重である．

第116号には，北出芳久氏(64)と山本富士夫氏(65)の福井県AALAの「マレーシア平和と友好の旅」関連の原稿2点が投稿された．前もって十分な準備と学習によってマハティール元首相との面会を成功させるなど，大成功の研修旅行となったことが詳細な報告からわかる．

　第118号には，児玉一八氏による４つの原発問題住民運動団体共催で行なった震災1年後の福島第一原発事故現地調査の22頁にわたる詳細な報告(66)が掲載された．様々な聞き取り調査はもちろん，放射線測定器4台を持ち込んで線量測定を行なう本格的な調査であった．

　第119号は，北陸地区シンポで講演された永井二郎氏(67)と宮本重信氏(68)の報告を中心とした自然エネルギー問題の小特集号となった．永井氏には，自然エネルギー利用の現状と将来，および永井氏自身が開発した「ヒートパイプによる地中熱利用」について書いていただき，宮本氏は福井県庁技師として長年取り組んできた，再生可能な地中熱と地中蓄熱の技術開発に関する豊富な実践例について報告してくれた．

　第120号には，憲法問題を重視して講演活動を続けている北出芳久氏が「憲法9条が危ない」を投稿してくれた(69)．北出氏の護憲に対する思いが伝わる力作で，日米軍事同盟と憲法の関係や非同盟諸国の平和活動も紹介してある．なお本号には，原発直下の活断層について長年勉強してきた山本雅彦氏が「若狭湾の原発と活断層問題」(70)という論文を投稿してくれた．北陸地区シンポで発表されたもので，活断層問題に関する基本文献と言えよう．

**６．第121号から第139号まで**

　第122号には，髙木和美氏の「『新修彦根市史通史編・現代』発刊中止の真相と発刊を求める取り組み」(70)が投稿された．この本の原稿は6人の専門家が長期間かけて書き上げ，市編纂室の職員との意見交換を重ねながら推敲をかさね，2009年12月の編集委員会で承認され700頁の確定原稿となった．だが，彦根市長が「政治的判断」で出版はしないと言いだし事件となった．その後，執筆者の学問の自由を守るための粘り強い闘いによって，本は出版の運びとなり事件は無事解決された．

第122号には屋敷紘美氏の憲法問題にかかわる論考「「時代の子」として憲法を選びとる」も投稿された(71)．屋敷氏は小集会でよく憲法問題の講師を務めていたが，氏が得意とする文学者の言葉を引用しながらの話は独特の趣がある．なお屋敷氏は121号から124号まで連続して投稿しており，124号に書かれた「「農協改革」で明らかになったこと」(72)は，元農協職員が書いたものなので貴重である．

第124号には，北陸地区シンポで基調報告をした吉川健司弁護士の「憲法9条と日米安保条約の歴史」(73)が掲載された．大変力の入った力作で，これを読めば戦後70年の間に，平和憲法の柱である憲法前文の精神や憲法9条が,日米安保条約とのからみでなし崩し的に骨抜きにされてきた歴史がよくわかる．

第125号には，朝日新聞記者の下地毅氏が，2015年9月14日から5日間にわたって福井駅東側広場で行なわれた「ストップ！　安保法制座り込み行動」を取材した渾身のルポ(74)を寄せてくれた．長文だが一気に読ませる筆力が光る，福井における「戦争法案」反対運動の貴重な記録である．

**第**126号には，北陸地区シンポで山本雅彦氏が講演された原発運転差し止め裁判と再稼働をめぐる動き(75)について書いていただいた．論文の中で，福井県原子力安全専門委員会が原発推進派の西川一誠知事に対する単なる御用委員会となっている実態が示されている．

第127号は庄野義之先生追悼号として発行されたが，128号には庄野氏の遺稿「「ゆらぎ」，「多様性」と事物の変化」(76)が発表された．この遺稿は，庄野氏が主宰した「論理を探る」という研究会でメンバーに配ったメモで，「ゆらぎ」と「多様性」という見地から，分野の違う学問を統一的に把握しようとした意欲的な試みとして興味深い．

第128号には，他に島田広弁護士による福井大学未払賃金等裁判の控訴理由書(77)が掲載された．一審裁判は大飯原発3，4号炉運転差止請求裁判で画期的な判決を出した樋口英明裁判長で始まった．だが，途中で裁判長が最高裁事務総局から送り込まれた「エリート裁判官」（別名・平目裁判官）の林潤裁判長に交代したため，一審判決ははじめに結論ありきの不当判決であった．控訴理由書は一審判決の誤りを全面的に批判したのもので，非常に説得力のあるすばらしい文章で書かれている．

第129号には，私が「福井大学未払い賃金等請求訴訟と「平目裁判官」」(78)を投稿した．この訴訟について地裁，高裁とも平目裁判官による棄却判決によって敗訴が確定した．裁判は，主張が正しくても勝てない場合は少なくない．裁判の結果が敗訴であっても，裁判を

起こしたことの意義が無になるわけではない．不法・不当なことに声をあげたことが大切だからである．裁判の記録も歴史に残るから，今回の闘いも後世の研究者が正しく評価してくれるはずである．

第132号は「省エネルギー・再生可能エネルギー」の特集を組んだが，その中で由田昭治氏に以前から取り組んできた「ふくい市民共同発電所をつくる会」の活動について書いて頂いた(79)．由田氏らは市民に出資をつのり市民共同の太陽光発電所をつぎつぎと作りながら，一方で既存のエネルギー使用設備を省エネルギー設備に改修してエネルギーの使用量を減らした施設を節電所と呼び，節電所づくりも行なっている．

第133号では「教育特集」と「原子力発電小特集」が組まれた．教育特集では「ゆきんここ共同保育所」以来40年の歴史を持つゆきんこの会理事長の玉崎辰雄氏が「保育の現場から保育制度を考える」(80)という論考を投稿してくれた．保育・幼児教育の無償化の不公平やその背景，給食材料費の保護者負担の問題点，保育・幼児教育と何かといった問題を詳しく論じた力作である．

　「原発小特集」では，小野一氏の「ドイツにおける放射性廃棄物最終処分場問題」(81)が投稿され，現在大きな問題となっている原発から出る放射性廃棄物の最終処分場をどうするかという問題について，小野氏は脱原発をめざしているドイツの事例を紹介しながら，放射性廃棄物の「取り出し可能性」の政治的意味を論じた．

　第134号には，山本富士夫氏の「父・山本武の戦争体験を語り継ぐ」(82)が掲載された．これまで山本氏は，父の戦争体験を語り継ぐ運動を続けてきたが，この報告は南京市で開かれた「世界平和友好交流会2019」の講演に招待されたときのもので，招待までの経緯から交流会の様子まで詳しく報告されている．

　第135号は「新型コロナ小特集」が組まれ，平野治和氏から医師としてコロナ禍に取り組んだ体験やコロナ対処法などをまとめた長文の論考が投稿された(83)．

　第136号には，菅義偉首相が日本学術会議の新会員105名の推薦者の内6名の任命を拒否した事件に対する全面批判の論文(84)を，吉川健司弁護士が投稿してくれた．この論文は，菅首相の行為が学問の自由を侵す法的にも絶対に許せない暴挙であることを示した．

　第137号は，福井地裁裁判長として歴史的な「大飯原発3，4号機運転差止」の判決を出した樋口英明氏を招いて講演会を開催したことを受けて，「原発特集」となった．その中で政治学者の小野一氏は「樋口講演会から学ぶ，原発訴訟史の中の福井地裁判決の位置づけ」を投稿した(85)．小野氏は，福井地裁判決を読み直し，これまでの原発裁判史の中に樋口判決を位置づけ，その意義を明らかにした．

第138号には，支部例会で話された伊藤勇氏の「メディアと権力」(86)が掲載された．月刊『世界』に連載されている「メディア批評」を手がかりに，「メディアと権力」について考えようと企画した例会で，伊藤氏の優れた解説で非常に面白い例会となった．権力べったりのメディアにさらされている今日，是非若い人に読んでほしい論考である．

138号には，寺岡英男氏の「大学自治と教育改革」(87)も掲載された．北陸地区シンポ「学問の自由と大学の自治」で話されたものだが，その中で寺岡氏が福井大学教育・学生担当理事・副学長として関わった共通教育改革に限定して，共通教育における教養教育，課題探究的な学習，英語教育，教学のガバナンス，加えて新しく発足した国際地域学部での継承展開を考察した論文で，記録としても重要である．

　第139号には，支部例会で話された小野一氏の「ロシアによるウクライナ侵略から８ヶ月／戦争のリアル」(88)が投稿された．小野氏のウクライナ侵略の分析は，国際政治学者ならではのもので非常に興味深い．とくに私は理想主義と現実主義で戦争防止の見方，ウクライナ政治への視点などが変わってくるという指摘の重要性に気付かされた．

**７．おわりに**

　『福井の科学者』は創刊以来ちょうど50年を迎える，「三号雑誌」という言葉があるように，雑誌の継続発行は常に困難をともなう，小支部の福井支部で50年間も発行を維持できたのは，機関誌の発行を支部活動の重要な柱としてきたからである，だが会員の高齢化によって『福井の科学者』の継続発行が危ぶまれている，若手会員を増やすためにも『福井の科学者』の活用が望まれる．

**参考文献**

（１）大沼正則･藤井陽一郎・加藤邦興『戦後日本科学　　者運動史（下）』青木書店（1975）

（２）下田屋一朗「福井支部準備会覚え書き」『福井の科学者』第11号（1977）

（３）城谷豊「日本科学者会議福井支部10年の歩み」『福井の科学者』30号（1981）

（４）ゆきのした文化協会・日本科学者会議福井支部　編『父と子の原発ノート』ゆきのした文化協会（1878）

（５）日本科学者会議福井支部編『地域を見直す』日本科学者会議福井支部（1984）

（６）日本科学者会議福井支部編『地域を考える』日　本科学者会議福井支部（1990）

（７）滝史郎「核兵器完全禁止を国連に要請する代表団に参加して」『福井の科学者』第18号（1978）

（８）小倉久和「医療における情報化―「豊かな国」の医療のシステムと医療情報システム―」『福井の科学者』第58号（1990）

（９）庄野義之「「起こり得ない」はずの事故―関西電力美浜２号炉の蒸気発生器のギロチン破断」『福井の科学者』61号（1991）

（10）首藤重幸「原発問題の法的研究①―原発における法的問題の概観」『福井の科学者』54号（1989）

（11）首藤重幸「私にとっての原発」『福井の科学者』64号（1992）

（12）首藤重幸「ヨーロッパ核燃料施設調査報告（１）」『福井の科学者』66号（1993），「ヨーロッパ核燃料施設調査報告（２）」『福井の科学者』67号（1993）

（13）首藤重幸「もんじゅ訴訟の現段階とプルトニウム」『福井の科学者』68号（1994）

（14）佐々治寛之「生物多様性をめぐって―ありふれた普通種と絶滅危惧種―」『福井の科学者』66号は（1993）

（15）笹木知恵子「樫曲湿地「中池見」について」『福井の科学者』66号（1993）

（16）鈴木邦雄「多様性尊重主義と自然保護―選別主義的自然保護論批判」『福井の科学者』71号（1995）

（17）長田勝「中池見湿地の保全をめぐって」『福井の科学者』67号（1993）

（18）横山俊一・福永吉孝・明石英章「―自然保護の立場から―中池見湿原（敦賀市）の植物」『福井の科学者』70号（1994）

（19）笹木進「中池見の魅力と保全の意義―ナチュラリストの視点から―」『福井の科学者』71号（1995）

（20）河野昭一「21世紀の環境問題を展望する」『福井の科学者』74号（1998）

（21）長田勝・森透「敦賀市中池見湿地の保全とフィールド･ミュージアム構想」『福井の科学者』77号（1999）

（22）目方守「プルサーマル計画に未来はあるか」『福井の科学者』75号（1998）

（23）木村亮「自治体職員のキャリア形成―福井県庁の事例より」『福井の科学者』76号（1998）

（24）松浦義則「戦国時代の白山麓地域」『福井の科学者（1999）

（25）高木和美「現行介護保険と介護保障の相違について―介護保険をどう捉えるか―」『福井の科学者』81号（2000）

（26）久常良・舟木紳介「在宅介護支援センターの予防的地域福祉機能―地域の社会資源としての機能と役割―」『福井の科学者』81号（2000）

（27）岡田知弘「21世紀の大学像と独立行政法人化問題」『福井の科学者』82号（2000）

（28）伊ヶ崎暁生「日本の大学―その現状・歴史的性格と改革の課題」『福井の科学者』82号（2000）

（29）竹内章郎「体験的国立大学論―筑波大法と社会の新自由主義的改悪との関連における国立大学法人の制度改悪―」『哲学と現代』31号（2016）

（30）隼田嘉彦「「満州国」について」『福井の科学者』

85号（2001）

（31）王麗杰・王桂勤著・髙建斌訳「「九・一八」事変と偽満州国に対する中国人の見方」『福井の科学者』86号（2001）

（32）加藤武市「福井の食と農および健康」『福井の科学者』90号（2003）

（33）加藤武市『畜産物と健康―卵・牛乳・肉の生産から考える―』科学堂（2005）

（34）小倉久和「大学システムにおける多様性-―大学統合における教育システムの意味を問う―」『福井の科学者』91号（2003）

（35）宮本重信「自然熱による路面の雪対策―蓄えられた太陽熱利用から蓄えての利用へ―」『福井の科学者』92号（2003）

（36）笹木進「開発計画の中止と今後の課題―敦賀市・中池見湿地保護活動経過報告―」『福井の科学者』93・94号（2004）

（37）竹内謙二「福井空港拡張反対運動の勝利的終結について」『福井の科学者』95号（2004）

（38）加藤忠夫「「ふくい思想の会」のこと」―日本科学者会議福井支部結成の前史―」『福井の科学者』96号（2005）

（39）森透「福井県敦賀市中池見湿地の保全と「NPO法人中池見」―市民・行政・企業のパートナーシップを求めて」『福井の科学者』97号（2005）

（40）島田広「もんじゅ最高裁判決の問題点，再審請求と今後の運動」『福井の科学者』98号（2005）

（41）渡辺三郎「「もんじゅ」のそもそもから，ビデオ隠しまで」『福井の科学者』98号（2005）

（42）田島伸浩「ありのままの歴史を知り学びあうために「平和文化史料観ゆきのした」の資・史料の活用を」『福井の科学者』99号（2006）

（43）長田好弘「ふたたび科学・技術に新しい風を～16総学に思いを寄せて～」『福井の科学者』100号（2006）

（44）長田好弘「研究者の権利のための闘争―NTT研究所でのたたかいをふりかえって―」『福井の科学者』103号（2007）

（45）佐藤正雄「福井豪雨による堤防決壊と足羽川ダム計画を考える」『福井の科学者』101号（2006）

（46）佐藤正雄「過大な建設費負担・並行在来線切り捨ての現行新幹線計画は凍結すべき」『福井の科学者』107号（2008）

（47）佐分利豊「数学文化と数学教育についての再考―エスノ数学に学ぶ（前編）―」『福井の科学者』101号（2006）

（48）佐分利豊「数学文化と数学教育についての再考―エスノ数学に学ぶ（中編）―」『福井の科学者』103号（2007）

（49）渡辺三郎「地震と原発」『福井の科学者』104号（2007）

（50）宮本重信「福井での公共事業の技術を考える―地方分権と環境の世紀の中で―」『福井の科学者』105号（2008）

（51）湯淺精二「研究者の倫理と権利の問題」『福井の科学者』106号（2008）

（52）平野治和「福井の医療崩壊」『福井の科学者』108号（2009）

（53）山本富士夫「“平和と友好の旅―近くて遠い国・韓国―”で感じたことなど」『福井の科学者』108号（2009）

（54）隼田嘉彦「戦地への手紙―再びこのような手紙を書かないために―」『福井の科学者』109号（2009）

（55）菅野礼司「物理学の基礎としての物質と真空概念の変遷」『福井の科学者』111号（2010）

（56）山本雅彦「「大地震」の「活動期」に入った日本列島での若狭の原発」『福井の科学者』111号（2010）

（57）坂東昌子「夫の思いを受け継ぐ」『福井の科学者』113号（2010）

（58）児玉一八「日本科学者会議「夏の学校in 福井～原発問題と日本の科学者～」報告」『福井の科学者』114号（2011）

（59）北原武道「若狭町から社会を覗けば」『福井の科学者』114号（2011）

（60）山本富士夫「福島原発災害の教訓と福井の原発問題」『福井の科学者』115号（2011）

（61）児玉一八「福島第一原発事故でまったく役に立たなかった原子力防災計画」『福井の科学者』115号（2011）

（62）飯田克平「住民運動・科学運動，科学者運動と原発推進政策」『福井の科学者』115号（2011）

（63）平野治和「「直ちに健康に影響を及ぼさない」とは―福島原発事故による放射線被ばくと健康影響―」『福井の科学者』115号（2011）

（64）北出芳久「21世紀の世界を動かす非同盟とASEAN―マレーシアとマハティールに学ぶ―」『福井の科学者』116号（2011）

（65）山本富士夫「マレーシア平和と友好の旅」―マハティール元首相との面談など―」『福井の科学者』116号（2011）

（66）児玉一八「福島第一原発事故現地調査報告」『福井の科学者』118号（2012）

（67）永井二郎「自然エネルギー利用を考える―現状・将来展望雑感と地中熱利用の事例紹介―」『福井の科学者』119号（2012）

（68）宮本重信「福井の平野と技術で，再生可能エネルギーを―地中熱と地中蓄熱―」『福井の科学者』119号（2012）

（69）北出芳久「憲法が危ない！―懐憲にどう立ち向かうか―」『福井の科学者』120号（2013）

（70）髙木和美「『新修彦根市史通史編・現代』発刊中止の真相と発刊を求める取り組み」『福井の科学者』122号（2014）

（71）屋敷紘美「「時代の子」として憲法を選びとる」『福井の科学者』122号（2014）

（72）屋敷紘美「「農協改革」で明らかになったこと」『福井の科学者』124号（2015）

（73）吉川健司「憲法9条と日米安保条約の歴史」『福井の科学者』124号（2015）

（74）下地毅「市民の直接行動は有効か―安全保障関連法案に抗するJR福井駅前「座り込み行動」の5日間―」『福井の科学者』125号（2015）

（75）山本雅彦「大飯・高浜原発など運転差し止め訴訟と再稼働の進行」『福井の科学者』126号（2016）

（76）庄野義之「「ゆらぎ」「多様性」と事物の変化」『福井の科学者』128号（2017）

（77）島田広「福井大学未払賃金等請求裁判控訴資料控訴理由書」『福井の科学者』128号（2017）

（78）髙木秀男「福井大学未払い賃金等請求訴訟と「平目裁判官」」『福井の科学者』129号（2017）

（79）由田昭治「市民出資による発電所と節電所」『福井の科学者』132号（2019）

（80）玉崎辰雄「保育の現場から保育制度を考える」『福井の科学者』133号（2019）

（81）小野一「ドイツにおける放射性廃棄物最終処分場問題」『福井の科学者』133号（2019）

（82）山本富士夫「父・山本武の戦争体験を語り継ぐ」～「世界平和友好交流会2019　南京市」招待講演報告～」『福井の科学者』134号（2020）

（83）平野治和「「冬来たりなば春遠からじ」冬期における新型コロナウイルス感染症に対する備え」『福井の科学者』135号（2020）

（84）吉川健司「憲法からみた日本学術会議への人事介入の問題点」『福井の科学者』136号（2021）

（85）小野一「樋口講演会から学ぶ，原発訴訟史の中の福井地裁判決の位置づけ」『福井の科学者』137号（2021）

（86）伊藤勇「「メディアと権力」の現在を考える―『世界』連載「メディア批評」等を手がかりに―」『福井の科学者』138号（2022）

（87）寺岡英男「大学の自治と教育改革―福井大学での共通教育改革の事例からー」『福井の科学者』138号（2022）

（88）小野一「ロシアによるウクライナ侵略から８ヶ月／戦争のリアル」『福井の科学者』139号（2023）